

令和6年度

文学部第3年次編入学者選抜学力試験問題

現代国語

注 意

1. 解答は、別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 総ページ数 — 10ページ
問題ページ — 第2～第6ページ, 第8～第10ページ
(第1ページ, 第7ページは白紙)
3. 試験終了後, この冊子は持ち帰ること。

I つぎの文章は、江戸の旅の「風景」について述べたものである。これについて、後の問に答えよ。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

問題文は、著作権の関係で掲載しておりません。

(大室幹雄『月瀬幻影——近代日本風景批評史』による)

(注) ○プレシオジテ——十七世紀フランス王国の上流社交界のサロンで発展した、言語や作法に洗練を求める風潮。

○山陽や拙堂——頼山陽(一七八一〜一八三三)と齋藤拙堂(一七九七〜一八六五)。
○弥次郎兵衛と喜多八——『東海道中膝栗毛』の登場人物。

問一 傍線部 a、e のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部 1 について、

(a) 「景観から風景が人のまえに現われて見えてくる」とはどういうことか、説明せよ。

(b) 「見る人の視線が浮動していなければならない」とはどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部 2 について、「社会の現実から遊離して浮動していた」とは、どのような状態か、説明せよ。

問四 傍線部 3 について、「武者修行型」とはどのような性質の「旅」か、本文全体の内容に即して説明せよ。

問五 傍線部 4 について、「旅によせる庶民一般の興味が「山水の勝跡」に向けられていなかった」のはなぜか、本文の論旨に即して端的に説明せよ。

問六 二重傍線部について、「風景の見かた／見えかた」をきめる「社会的な秩序」とは、本文に述べる江戸後期において、どのようなものだったのか、簡潔に説明せよ。

(このページは白紙です。)

II つぎの文章は、横光利一「春は馬車に乗って」の冒頭である。結核と思われる「胸の病氣」で療養中の「妻」を「彼」(夫)が看病している場面である。これを読んで後の問に答えよ。

海浜の松が凧に鳴り始めた。庭の片スミで一叢の小さなダリヤがチヂんでいった。

彼は妻の寝ている寝台の傍から、泉水の中のニブい亀の姿をナガめていた。亀が泳ぐと、水面から輝り返された明るい水影が、乾いた石の上でユレていた。

「まアね、あなた、あの松の葉がこの頃それは綺麗に光るのよ」と妻は云った。

「お前は松の木を見ていたんだな」

「ええ」

「俺は亀を見てたんだ」

二人はまたそのまま黙り出そうとした。

「お前はそこで長い間寝ていて、お前の感想は、たった松の葉が美しく光ると云うことだけなのか」

「ええ、だって、あたし、もう何も考えないことにしているの」

「人間は何も考えないで寝ていられる筈がない」

「そりゃ考えることは考えるわ。あたし、早くよくなって、シャツシャツと井戸で洗濯がしたくってならないの」

「洗濯がしたい？」

彼はこの意想外の妻の慾望に笑い出した。

「お前はおかしな奴だね。俺に長い間苦勞をかけておいて、洗濯がしたいとは変った奴だ」

「でも、あんなに丈夫な時が羨ましいの。あなたは不幸な方だね」

「うむ」と彼は云った。

彼は妻を貰うまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘を考えた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間を考えた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病氣で寝て了ったこの一年間の艱難を思い出した。

「なるほど、俺ももう洗濯がしたくなった」

「あたし、いま死んだってもういいわ。だけでも、あたし、あなたにもつと思を返してから死にたいの。この頃あたし、そればかり苦になつて」

「俺に恩を返すって、どんなことをするんだね」

「そりゃ、あたし、あなたを大切に、……」

「それから」

「もつといろいろすることがあるわ」

——しかし、もうこの女は助からない、と彼は思った。

「俺はそう云うことは、どうだつていいんだ。ただ俺は、そうだね。俺は、ただ、ドイツのミュンヘンあたりへいっぺん行って、それも、雨の降っている所でなくちゃ行く気がしない」

「あたしも行きたい」と妻は云うと、急に寝台の上で腹を波のようにうねらせた。

「お前は絶対安静だ」

「いや、いや、あたし、歩きたい。起してよ、ね、ね」

「駄目だ」

「あたし、死んだつていいから」

「死んだつて、始まらない」

「いいわよ、いいわよ」

「まア、じつとしてるんだ。それから、一生の仕事に、松の葉がどんなに美しく光るかって云う形容詞を、たった一つ考え出すのだね」

妻は黙つて了った。彼は妻の気持ちを転換さすために、柔らかな話題を選択しようとして立ち上った。

海では午後の波が遠く岩にあたって散っていた。一艘の舟が傾きながら鋭い岬の尖端を廻っていった。渚では逆巻く濃藍色の背景の上で、子供が二人湯気の立った芋を持って紙屑のように坐っていた。

彼は自分に向って次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと思ったことはまだなかった。このそれぞれに質を違えて襲って来る苦痛の波の原
因は、自分の肉体の存在の最初に於て働いていたように思われたからである。彼は苦痛を、譬えば砂糖を甜める舌のように、あらゆる感覚
の眼を光らせて吟味しながら甜め尽してやろうと決心した。そうして最後に、どの味が美味かったか。——俺の身体は一本のフラスコだ。
何ものよりも、先ず透明でなければならぬ。と彼は考えた。

問一 傍線部A～Eのカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部1「あたし、早くよくなつて、シャツシャツと井戸で洗濯がしたくつてならないの」、傍線部2「俺ももう洗濯がしたくなつ
た」とあるが、それぞれの「洗濯」をふまえて発言の意味するところを答えよ。

問三 傍線部3「しかし、もうこの女は助からない」とあるが、「彼」のどのような思いを表現していると考えられるか、「妻」が「この
女」と表現されていることをふまえて説明せよ。

問四 傍線部4「子供が二人湯気の立った芋を持って紙屑のように坐っていた」とあるが、どのようなことを象徴的に描写しているか、
「紙屑のように」という表現をふまえて説明せよ。

問五 傍線部5「俺の身体は一本のフラスコだ。何ものよりも、先ず透明でなければならぬ」とはどういうことか、説明せよ。